

言葉からの物語



ハーモニイベル 著

目次

| | |
|-----------------------------|----|
| 序 | 1 |
| I | |
| 人形のマノン | 5 |
| SF 恋愛コメディ『リップ』 | 7 |
| いとけなき呪い | 9 |
| 恋は卒業試験 | 12 |
| 君は僕の宿命 | 14 |
| II | |
| 愛を探す花～アッタリナ～ | 17 |
| 優しい果実 | 19 |
| 吾輩（♀）は猫じゃないのに | 21 |
| 究極の探偵 | 24 |
| 迷宮の女神 | 27 |
| 24 世紀のテレワーク | 31 |
| III | |
| 明日よりも向こうへ | 39 |
| 33 度目の真実 | 43 |
| IV | |
| 〈ムーングラス〉と〈スターグラス〉 | 51 |
| V DEEP HORROR マノン～螺旋の愛～ | |
| プロローグ | 61 |
| 多音 | 64 |

序

ここにある作品は皆、ミューズに捧げられている。

美しい彼女たちがミューズになって〈言葉〉を投げしてくれなければ、ここに在る物語はどれ一つとしてこの世に存在しなかったことは間違いない。なので、古代の詩人が作品を、詩の女神に捧げたように、私も、ここにある作品を、感謝をこめて親愛なるミューズたちに捧げたい。

本作品集に収められた短い物語はすべて、何か一個〈キーワード〉を投げてもらって、それを受けて私が即興で創作したストーリーである。字数の限られた Twitter 上に模型・デッサンとして書いたものなので、話が書きかけのものが多いのは、そうした事情を反映している。

物語はすべて、麗しく美しいミューズが出してくれた一つの《言葉》が元になっており、それに触発されて創ったものだから、作品の初めの所に、《ミューズワード》としてその時出された〈語句〉を掲げておいた。それを見て、私が即座にイメージを膨らませて創ったのがその下に書かれた物語である。

文章が数行単位に刻まれて表示されているのは、Twitter に書かれた時の形式そのままだからである。今年の7月1日（ついこの間）から、Twitter に制限がかかるようになり長文を入力すると閲覧不能になる不便が生じはじめた。その為、入力はできても、画面表示を確認しながら推敲することができないので、臨時にここに記載を移すことにしたというだけの事情で本書は纏められた。したがって、本書は、別段、予め企画したのではなく、単なる偶然の賜物、私の個人的な控えのようなものだから、記載形式というか文章形式は、Twitter に書いた時のままになっている。

パプーに移してみると、やはり紙幅が豊かなので、文章を無理に切り詰めなくて済むのが便利だなと感じた。お陰で、元の文章の切り詰め過ぎたところを幾つか自然な表現に修正できたのは幸いであった。

Twitter は、140 字刻みで、連ねて長文を書かねばならないのが、何とも中途半端で、便利で不便である。刻んで書くのは書き手にとって負担を分割するので便利だが、140 字という枠は、日本語の文章を刻む単位としては不適切で使いにくく中途半端で不便である。200 字くらいだと便利だろうなと思う（400 字になってしまうと、今度は読む方が負担になる虞れがある）。

こんな風に一冊に纏めてしまうのも、読む方はやはり負担増かもしれないが、一気に通読するのでなければ、検索には便利かと思う。

本書はこれで完成したわけではなく、物語をさらに追加していきたいと考えているのだけれど、麗しきミューズが、ともかくも何か《ミューズワード》を投げしてくれないと、

物語が生まれたい。もし、ミューズに祈りが届くなら、また気軽に《語句》を投げて欲しいな、と切に思います。どうか親愛なるミューズに祈りが届きますように。

2023年7月7日 七夕

I

人形のマノン

* ミューズワード《絵本》を受けて...*

>こんな話を即興で書いてみた

>午前 7:46・2023年 6月 10日

足の悪い車椅子の女の子がいました。器量も良いわけではなく性格も暗くて内気でした。そんな彼女を見かねた父親が或日、一体の人形を彼女に贈りました。見惚れるほど美しい女性の姿をした等身大の人形です。

彼女は気に入ってそれにマノンという名前をつけ、日毎に自分の思いを語りました。すると...

「私、貴女になって外の世界を自由に歩いてみたいわ」と女の子が人形に語った夜でした。ふと目覚めると、しっかり足をついて立っている自分に気づきました。えっ、と驚いた時。「マノンちゃん。貴女はマノンになったのよ」と声がしました。見るとベッドに横になった自分が自分に向かって話してきました

「ワタシは人形よ。アタナと中身が入れ替わったの。そして貴女はワタシの姿をした生身の人間の女になったのよ。手や頬を触ってご覧なさい。柔らかくて温かいでしょ。こちらのあなたの姿の方は固くなって人形のようになってるわ」...彼女が頬に触れ、鏡を見ました。そこにはマノンちゃんになった自分が。

「さあ、好きな処へ行って、やりたい事を何でもするといいわ。次の雷の夜まで貴女はマノン。だから、一つだけ注意してね。空に雷が鳴り始めたらすぐに戻ってくるのよ。もし遅れたら大変な事になるから、それだけは肝に命じてね。そして・・・」

「・・・そしてここへ戻ってきたら、固くなったワタシにむかってこう言って『黒い王子が赤い姫を追ってくるわ』そうしたら、貴女と私は入れ替わって元に戻れるから。いいわね。それだけは約束よ」そう言って自分の姿の人形は沈黙し、鏡の前には美しいマノンになった自分が立っていた。

一と、こんな冒頭

この人形が言った謎のセリフについては、この話が元になってるよ。

<https://www.aozora.gr.jp/cards/001475/card51066.html>

気になったら休日の読書に読んでみてね。

では、ごきげんよう。

SF 恋愛コメディ 『リップ』

ミューズワード：「リップ」

SF 恋愛コメディ 『リップ』

宇宙人と地球人の間に生まれたヒロインは、見た目はまったく地球人の女性と同じだが、唇から濃厚な果実の芳香が漂い食欲を異様にそそってしまう。なので、どこに行っても唇を狙われて追いかけて回される。でも、彼女はたった一人の男にしか唇を許さないと心に誓っていた。

しかし、彼が本当に自分のことが好きなのか、本当は唇の方が好きなのか、彼女は解らなくなり、そしてそれを知るために、なんと…

*

みたいな感じだね笑。

* (6月14日 追記)

ちなみに、粗筋の冒頭（掴み）だけ投げておいて、後の展開は考えてないでしょ？ と思われると心外である。だいたい冒頭を書くと、書きながら同時に、脳内で着地のイメージもぼんやり浮かんでいる。例えば、『リップ』の最後はこんな感じだ：**

ヒロインは悩んだ挙げ句、従兄弟（宇宙人の）に相談すると、唇のフォロモン発散を停止する、まだ実験段階の医薬品を宇宙便で送ってくれる。ところが地球の環境、とくに低気圧で湿気が多い日本では、注射薬の成分が変質しており、更にヒロインが副作用を押さえる錠剤の分量と飲み方を間違えてしまう。

一定期間だけ唇のフォロモン発散が停止される筈だったのが、予期せぬ副作用がヒロインの唇に現れ始める。なんと… 果物の芳醇な香りから一転して、強烈な、生ゴミの異臭に変わってしまった。あれほど寄ってきた人間たちは皆、彼女の周囲から一斉に居なくなる。

失意の彼女は、彼が臭いに気づきそうな瞬間、彼の傍から猛ダッシュで逃げるが、彼は心配して追いかけてくる。森のくまさん状態。とうとう行き止まり。彼が近づいてくる。もう辺りは生ゴミの激臭に満ちている。

...更に距離を詰めてくる彼。「もうわかったでしょ！ 行ってよ、行ってたら！ …もうワタシこのまま治らないんだから」と、泣きながら事情を早口で怒鳴る彼女。…更に近づく彼。その手が彼女を抱き寄せ、そして、ごく普通の態度で彼女の唇に Kiss する。それは今までと何ら変わらない熱い KISS だった。

勿論最終的には、唇の異常は治癒してハッピーエンドになる。(という感じだね：『リップ』の最後は)

いとけなき呪い

ミュージワード：「りんご飴」 + (差し出してる画像があった)
これはなかなか難しいと思った。深い意味がありそうだったから
(6月30日)

「登録商品が入荷しました」待ちに待っていたメールだ。即座に注文しないとまたすぐに売れてしまうだろう。Youtuber エミリア・ハットンは、今度は躊躇なく、それを試してみる為に取り寄せた。これを逸したら次はいつになるか分からない。

以前、かなり前だが《男を落とすホワイトシチュー》というのを試した同じ会社の商品だが、シチューを正統派の天使の商品だとしたら、今度のは、恐ろしいほど進化した悪魔的な効き目のある食品だという。「くれぐれも気軽な使用を禁ずる」と太字の注意書きがある。

品質管理の為の厳重な包装を解くと箱から鮮やかな赤の輝きが出てきた。
最高級マジカルブランドの新商品、『ジェラシー』という《毒りんご飴》だ。自分が好意を持っている男が他の女に入れあげている場合、その憎い女にコレを一口食べさせると、その女から感情を一切取り去ってしまうことができる。そうなると、会話してもデートしても彼氏はまったく愉しくないの、自然と関係は冷え、カップルは破綻してしまう。

そこに、彼女の食べかけのりんご飴から採った林檎を擦りおろして煮込んだカレーを、今度は自分が、意中の男に、アーンと食べさせると、その男は食べさせた女に夢中になる。それが、この毒りんご飴が持つ邪悪な効能であった。二本入っているのは万が一失敗したときの為の予備用である。

さあ、コレを入手したからには、早速、と彼女は、かねてから狙いをつけていた憎き白雪姫のもとへ向かうことにした。つまり彼が今入れあげているあの娘のところへ。

格好いい真黒なオートバイに彼女は跨る。彼女の愛車だ。黒皮のライダースーツは美しくスタイルの良い彼女を女豹のように引き締めている。長い髪を後ろへいなし被ったヘルメットも漆黒に輝いている。

そのバイクならその気になれば時速 250km は出る。が、彼女はバイクに跨るといつものように平均 30km で走り始めた。速いのは怖いのだ。見てなさいよ白雪姫。横をスクーターに追い抜かれながら、彼女はゆっくりと急いだ。それでも、彼女の姿は様になっている。

魔法使いの老婆ではなく、おっとりした美人のエミリアに勧められて警戒する人の方が少ない。難なく毒りんご飴を白雪姫に齧らせると、齧りかけのそれを持って、彼女はまたゆっくりと急いで自宅に戻った。今度はカレーの準備を念入りに始める。

そして数日後、エミリアは意中の彼をドキドキしながら待っていた。Youtube に出したいからとカレーの試食を頼まれた彼が、ようやく部屋へとやって来る。そして...

「はい、アーン」スプーンでカレーを彼の口に運ぶ。「ちょっと待って」と彼が制止し「その前にコレ」と苺を一つ出してエミリアの口に入れた。「美味しい？」と彼「実はね、それ魔法の苺なんだ。食べさせた男に夢中になるんだってさ笑。ホントか分からないけど」

(どうということ?) 苺をしっかりと食べ終えてしまったエミリアは、キョトンとした。「君のこと高嶺の花だと思ってるからさ俺。その苺を食べさせないと好きになってもらえないと思ったんだ」彼は頭を掻きながら「でも邪道だと思うから、効き目がでる前に言っておくよ。どうせそんな効目は続かないしね」

彼がそう言って笑ったのと同時に、エミリアは突然泣き出した。涙が墮ちる。そうだったのか、なんだ、互いに魔法の商品なんか要らなかったんだ・・・、と判ったら、その途端、涙が溢れてきたのだ。

白雪姫に、あの娘にあんな酷い事をする必要もなかったんだ、と急に悔やまれた。「あの娘はすごく素直だから可愛いんだ」と彼が言っていたのを思い出す・・・。それは、私に、もっと素直になって欲しい」って言ってたんだ。愛の心がエミリアのなかに広がって

き…、自分がどんどん素直になっていくのを感じた。

(これは苺のせい?)

「魔法の苺が私をこんな風に? ねえ、そうなの?」

「苺は苺だと思うよ。普通の苺が、相手には魔法だったらいいな、と。ただそれだけだよ」

「さてと、それじゃ君の魔法のカレーを食べてみよう」と食べようとした彼をエミリアは、これはダメ、と制した。そして、いきなり立ち上がり、部屋の隅へ走ると、しまってた予備用のもう一本の毒りんご飴を出して、泣きながらそれを思い切り嚙った。

／ END

恋は卒業試験

凸凹さんをはじめて観たときの第一印象から
なので、ミュージワードは：(当時の本人) だ。
午後 9:27・2023年 6月 17日

ユニカは魔界の女王を目指している魔女候補生だが、ドジなのか皆のように巧みに魔法が使えない。それでも何とか最後の関門である卒業試験にこぎ着けた。合格すれば晴れて一人前の魔女になれる。で、今年の課題は、人間界で男を一人ボロボロにして破滅させる事、であった。

よーし、と意気込んで彼女は人間界にやってきた。そのまま可愛い人間の女の子として、様々な男を観察し、これだ、というターゲットを見つけた。全く破滅しそうな性格の男だったが、もう破滅してるじゃんというくらい底辺の生活をしてる。魔法が下手でも、しめしめこれなら簡単、というわけで、

ユニカは、男に近づいて、彼女になって、さり気なく彼を破滅させようと、色々と画策し実行する。のだが、どういうわけか、彼女が色々やればやるほど、彼は幸福になっていく。何だか順調に事が運び、奇跡のような事が起こるのだ…。なんでよ？ と彼女は自分がドジなのかと落ち込む。

魔界から二名の審査官が進捗具体を中間調査にやってくるが、一回目の審査官にはこっぴどく叱られる。必死に彼を破滅させようと頑張るが、彼はさらに幸福に。ユニカの方が破滅しそうだ、そこへ二人目の審査官が来た。この格の高い高齢の魔女は「お前は実は魔界の生まれではない」とだけ教える。

実はユニカは赤ん坊のとき魔界へ攫われた天界の姫であり、本当は天使なのであった。だから、傍にいただけで相手はどんどん幸福になるのであった。天使は女の姿になって

一人の男を幸福にすると、第一級の天使として認められるというのが天界の試験であり、気づかぬ内に彼女はそれに首席で合格していた。

という感じ。そんなストーリーが、初めて観たとき、あたまたに浮かんだのを覚えている。

君は僕の宿命

ミュージワード：「ジブリ風」
よく解らないがこんな感じかな。

『君は僕の宿命』

或る大切な記憶を かつて 自ら封印した王女がいた。
その為に姿は赤ん坊に戻り、小さな村で今は平凡な独りの少女へと成長して暮らしていた。
だが、全てを忘れた今でも。平穏な毎日の中で、何故か 自分の大切な何かが思い出せない

そんな強い気持ちに、十七歳の誕生日が過ぎてからは特に襲われるようになった。
けれど、そんな時ほど家の者は強く少女を諫めるのだった。
少女の記憶の封印が解かれたとき、世界は崩壊してしまうのだから・・・。

そんな時、ひとりの少年が村に現れる。

その少年は、人の心の奥に眠っている大切なものを蘇らせる不思議な力を持っていた。
そして少年は、自身もまだ知らないある種族の末裔でもあった。
それは世界を崩壊させる者を抹殺するという宿命と、その為の特別な力を持った一族。

少女の力と、少年の力。それを利用しようと暗躍する二つの悪の集団が入り乱れ、
少年と少女は互いに惹かれあいながら、すれ違いを繰り返し、
やがて、協力して窮地を乗り越える。そして・・・ついに、真実の森の奥で 互いの運命の瞬間を迎える。

午前 4:56 ・ 2015 年 4 月 13 日
(これはかなり以前に、おゆりさんに書いたやつだ)

愛を探す花～アッタリナ～

ミュージワードは、

金木犀さんが（お眼菓子）してる画像

詩的な絵本をイメージして書いた。当の画像が挿絵に必要かも知れない笑

6月27日

宇宙植物園に一鉢のカラフルで珍しい花が運び込まれ植えられたが、翌日忽然と消えてしまい、代わりに誰も居ない筈の植物園の中を彼女が歩いていた。眼帯のようなソレを彼女は太陽と呼び、空を激しく恋い焦がれた。だが温室の天井はガラスで覆われている

その植物園の中央には巨大な棕櫚の木が一本樹っていた。珍しい花が植えられた時、それを見下ろしていた棕櫚は、アッタリナと名札の付いたそのお転婆そうな花が、今すっかりカラフルな女になって植物園内を徘徊する姿をみていた。彼女は毎日天井を見上げては溜息をついている。

何事も無かった小さな宇宙植物園のなかの異変は溜息をつくカラフルな女の出現だけではなかった。中央の巨大な棕櫚が、それから徐々に上へ上へと伸び始めたのだ。研究者が気づいたときには、もう天井スレスレにまで伸びており危険だと思った時には遅かった。棕櫚はガラスの天井を突き破り、大きく割れた

天井の穴からは青空が覗いた。毎日溜息をついて天井を見上げていた彼女の眼に、恋焦がれていた澄んだ青空が見えた…。と同時に冷たい外気が吹き込んで、棕櫚はみるみるうちに枯れてしまった。外気に触れたら枯死することは棕櫚は承知していたが、彼女に空を見せる為、懸命に伸びたのであった。

彼女は棕櫚に駆け寄りシッカリと抱きついた。大切なものを抱きしめてるようにも見えた。また、まだ樹が立っているうちによじ登れるか確かめてるようにも見えた。

一日が何年かのように過ぎ、何年かが何日かのように過ぎはじめた頃。

ちょうど、愛を探して空を見上げてた小さな花の伝説が人々に語られはじめた頃。棕櫚の立っていたその宇宙植物園の真ん中近くで、珍しい小さな花が咲いているのを見た、という人もあったが、実際のところ彼女がその後どうなったのかは、誰も知らない。／
END

という絵本かな。題は『愛を探す花～アッタリナ～』

優しい果実

ミュージワード：(なし) やさしい果実さんのイメージから

こんな童話はどうかなと発想した

6月11日

やがて「幸せ空間」へ行くことが約束されたエリートの寄宿学校に入った活発な少女寿々之宮寿々乃は、誰とでも仲良くする社交術が得意な一方で、内心には清らかな孤独も抱えていた。或日のこと、寄宿舎の裏手で悪ガキの集団が子猫を古井戸に投げ込むのを偶然みた。

その日の夜、彼女は、皆が寝静まってから、独り真っ暗な井戸に飛び込んで、怪我をしつつも、見事に落ちた子猫を救い出すのだが、あと少しの所で（子猫を抱いているので井戸から這い上がることができず）絶体絶命に陥いる。もうダメだ、と思って手が壁から離れそうになった瞬間、彼女の手首を掴んで、一人の少年が引っ張り上げてくれる。

暗闇の中その少年は何も言わずに立ち去ったが、暫くすると彼女は、その学校をもう何度も留年しつづけている少年を知る。それが、あの夜の彼だった。問題児であるその少年と交流するうち、彼女は一緒に廊下に立たされるわ、職員室に何度も呼ばれるわ...

じぶんがコースからどんどん外れていきそうな不安と、彼を何とかしなくちゃ、ほっとけない、という思いとの板挟みに苦悩する。そのうち、少年が留年し続けながらも退学にならない理由を知る。彼は、飛び抜けた頭脳の持主だったのだ・・・。

*

みたいな童話はどうかな？ 題名は『優しい果実』

追記すると：

寿々乃が、このエリート学校に転入できたのは、試験の成績が常に満点だったからなのだが、

そこには、ある事情が隠されていた。彼女は試験の答など全く不明でも、マークシートの選択肢を絶対に間違えない、という特殊な才能を持っていた。1，2，3から選べ、とかア、イ、ウ、のどれか？と訊かれると、直観で正解が判る彼女は、選択肢を絶対に間違えないのだ。(仮に迷うことがあっても、そういう時は先生や職員室のことを頭に浮かべると、これが答だなと直観できるのであった)。

一方、彼は、全問すべて解っていて答案じたいはいつも満点なのであるが、絶対に答案用紙に自分の名前を書かないので、0点を取り続けて落第していた。意地悪く彼だけに、異様な難問ばかりを出題しても、時間内に余裕で答案を書き上げ満点なのである。だが氏名を記さず0点になる。

こんな二人がコンビを組んで、大きな謎に挑むことになるのだが、……

という感じ。

吾輩（♀）は猫じゃないのに

ミュージワード：(なし)

癒しの華さんのイメージから発想した。

午前 8:20・2023年 6月 15日

夜、窓辺にある机の上に一冊のノートが開いたまま置かれていたが、今その頁に一筋の月光が挿し込んできた。其処には、まだ完成していない『大好きな白い華』という詩が数行書かれていたが、その中の一行がモゾモゾと動き始めたと思ったら《美しい癒しの華》という文字が、突然ぐいんと頁から起立した。

起立した文字は、月光を滑り台にして床に着地すると、その光のスポットのなかで、スーっと等身大の女になった。美しい女は、独り暮らしの男の部屋の中を見回す。机の向こうにあるベッドのなかで男がひとり眠っていた。

彼女は男を起こさないようにそーうとキッチンへ移動した。すぐに朝になる、このままでは...、と彼女は困った。だって、真っ白なウエディングドレス姿なのだ。こんな姿で初めましてと言うなんてムリ。出口の扉の前で呆然と蹲っていた。ら、いつの間にか猫になってそのまま朝、玄関で丸くなっていた。

「どうやって入ったんだろ、迷い込んだんだね。まあいいや、気に入ったら此処に居ていいよ」とその朝、白猫のわたしに「おはよう」と言って以来、彼は私と暮らしている。ただ、私が本当は彼の詩からこの世界に生まれ出た《女》であることはまだ彼は知らない。
ハァモニィベル

というわけで、吾輩は女である。名前は、マアヤ。普段はずっと猫の姿をしている。彼はものを読んだり書いたりしている。昼間、彼が他の女に関して何か書いていたりすると、私はタイピング出来ないように、ドッカーリとキーボードの上に蹲るのだが、すると彼は、鼻を私の鼻に合わせてきて「ダメだぞ」と

額でわたしの額をすりすりしてくる。どかさされても私はまた頑固に同じ事をするが、彼はニコっとわらってまた同じ事をする。で、私もまた負けずに…。それでも、彼は私が女だと気づかないのだ（ちょっと爪を立てたくなる）。

…いつも、夜の3時になると、私は起き出し、美しい女の姿にもどって、彼が眠っている顔を見ながら、じっと横に座っている。起こしたいけれど、起こすのが可愛そうな気がして、じっと朝が来るまで、彼の寝顔を見ているのだ。そして朝、彼が起きる時には猫になっている。

彼は、眠ると絶対に起きない男なのだ。赤ん坊の頃からそうで逆さに吊られても目を覚まさない子だったそうだ。18歳の頃一人暮らしを始め、新聞配達から帰って陽射しが強くなってからようやくベッドで眠り始めるが、駅の真ん前の安アパートは、ちょうどその時間が電車の轟音が溢れ返る時間帯なんだ笑と彼

が膝の私を撫でながら思い出を語った事がある。

普通の人なら耐えられなかったろうが、彼は持前の性質のお陰で、一度眠ってしまうと全然気にならなかったそうで、ある時、寝ている窓の真横で道路工事のドリルの連射爆撃を一日延々とかまされた時も、寝ている彼には何でも無かったよ、と。

一度眠ると決めたら眠るのを貫くというわけでもないのだが、自然とそうできてしまうんだ、と哀しい眼で明るく言う彼だった。

というわけで、私がじっと夜見ていると全然起きない。なので、私も負けずにじっと、ベッドの縁に座って彼を見ているのだった。

「飛びかかってお出でよ」急に彼が寝言を呟いたので、吃驚して「アッ」と声を上げて落っこちてしまった。すると、珍しく彼が夜中に目を覚まして眼を擦りながら「いますごく可憐な女の人の声がしたけど…」と起き上がって、床にいる私を見た。が、わたしは驚いて落っこちた時に、猫の姿になっていた。

* * *

といった感じの物語。

題名は「吾輩は、猫じゃないのに」

同居するマアヤのお陰で、様々なトラブルから救われる彼だが、一向に、白猫マアヤの

本当の姿に気づかない。マアヤも言えばいいのに絶対言わない。

一言、女の姿の時に「大好きだよ」と彼に言われれば、猫に戻らないのに。

午前3時から数時間しか女の姿でいられない彼女と絶対眠ると起きない彼。

無理やり起こしたって全然いいのに、マアヤは頑なに彼を静かに眠らせてあげたいと、自然に目覚めるまでじっとひたむきに待つのがあった...

マアヤほど、彼から愛される女性はいない筈なのにな。

理想の女性が傍にいるのに気づかない男っているよね。

そんなストーリーだね

究極の探偵

「究極」というテーマをもらったからね、
折角だからいま書いてみるよ。即興の粗筋だけどネ。
書き出しは、こんな感じかなあ・・・

6月12日

愛する者が傍に居るのがむしろ平凡な日常だとしたら、それが、究極の時代へと変化してしまっただけの時、愛の行方もわからなくなる。離れ離れの愛と愛は、それぞれが究極の境遇に直面しながら別々に暮らす毎日を送り、不在する愛に苦しむ。...けれども、究極の時代は始まるまで解らない。

そうなる前の、弛緩した惰性を垂れ流す毎日を、究極へ向かう予兆だと人々が感じたとしても、その時は（まだ）究極の時代とは呼べないからだ。ただ、究極の時代になると、必ず、人々は不在になった愛の行方を探し求める。

*

寿々城寿々絵（スズキスズエ）の日常が変わったのは、小さな或る出来事がきっかけだった。と言っても、そもそも寿々絵の日常は幼い頃から、もう平凡ではなかったが。彼女は日本中を旅して回るサーカス団の一員だった。美人で可愛いので人気があり、神業といえる身体能力でいくつもの曲芸で観客を魅了した。

体操選手になろうかと思ったが、実はそれが出来ない理由が彼女にはあった。平均台が嫌いな事と、もう一つ、誰にも言うことができない或る秘密があったからだ。

いつも仕事で全国を回りながら、彼女の楽しみは、食べ歩きをすることで、その《或る小さな出来事》があったのもその時だった。アンティーク調の店内を見回していると、ま

だ注文してないのに「究極のケーキです」と、卓上に運ばれてきて「これはサービスです。さあどうぞ召し上がれ」と勧められた。

究極というだけあってケーキは見るからに美味しそうだった。しかも「これには運命の人を引き寄せる力があります」と言う。それをペロリと食べてから、である。彼女の平凡な日常が変わってしまったのは。

さぞやモテモテになるのだろうと思ったら、逆にそれ以来、バラ色どころか、周囲の男がみな色褪せて灰色に見えるようになった。一体どうしちゃったんだろう、と愕然としている時、団のボスから突然、例の仕事を命じられた。サーカス団は表の顔、裏の稼業は超一流の産業スパイ集団なのである。

…その夜、彼女はとある高層ビルに忍び込み、とある企業の機密情報を盗み出して、くノ一のように天井や壁を這うように出口に向かっていた。

と、その時…

左の足首に何かがシュルッと巻き付いて、彼女の体は引っ張り落とされた。「残念だったね。たまたま僕が今日は見張っていたから」と背後から爽やかな男の声がした。背中を抑え込まれる気配に反射的に出した蹴りを軽く受け止められ、さらに速く繰り出した肘打ちと拳も、続けて軽くいなされた。

肩を抑えられた時、相手と眼と眼がピタリと合った。寿々絵の口には吹針が仕込んである、吹きかけるチャンスだと思ったが、彼女はマスクをしてるので吹くことが出来ない…しまった。「ついてなかったね、女ルパンさん。でもよくあれだけの防犯センサー網を突破して来れたね」。彼女は顔をそむけた。

その瞬間、男は、寿々絵のマスクをズラし彼女の横顔を確認した。その刹那、寿々絵は毒針を吹こうとしたが、そうするには男の眼があまりにも優しかった。それに（なんでこの男は灰色じゃないのよ）と衝撃を受けたせいだ。男は寿々絵がたすき掛けに背追ってる鞆からノートを取り出し回収すると、「懇意にしているこの社長に頼まれてね、今日だけ僕が見張っていた。

そこに運悪く君がやって来たのさ。だが、賊が来ることは事前に企業側に漏れていた。裏

切り者がいるようだな君の身内に」

「アナター一体誰よ」

「僕かい？ 僕は、史上初の究極の探偵さ」

「今日は防犯の依頼を受ただけだからね、犯人逮捕の契約はしてない。もう二度と、こんな究極の場面で君に遭いたくないな。もっと平凡な日常で...、縁があったらまた逢おう。気をつけて帰りたまえ、手に怪我をしてるよ。それに、口に針も危ないよ」。その言葉を聞きながら、寿々絵の体はもう走っていた

(その爽やかな声を聞きながら、体はもう走っていたが、)

寿々絵は心のなかで《絶対にふたりはまた逢える》と、そう強く直観し確信していた...

*

以上が第一話「ごきげんよう」

連作短編シリーズの予感だね。笑 / END

6月13日

あ、タイトルは『究極の探偵』にしよう笑。

迷宮の女神

ミュージワード：本人のイメージ & 「ミラクル」

午前 6:38 ・ 2023年 6月 16日

綺麗な光さんへ

綺麗な光さんから何か【テーマワード】があるかな、と思って観てるんだけど、キャッチする機会がなかなかなくて難しいね。

光さんのヒロインイメージは、僕の中でけっこう鮮明なんで、明るい話にはなるけどね。暗ら〜いハードな泥々した場面に光さんを立たたく無いな、という感じがあるからね、画面の印象というか、話の雰囲気は光さん自体からある程度決まってくる。でも、いつも考えられるからキーワードが要るんだ。

光さんのイメージは、エプロン姿がよく似合う若奥さんでラフな支度でもチャーミングだけどいざお出かけとなると妙にフォーマルなセクシー美人にもなるので全然日常見えて飽きない素敵な天使という印象。なので『天使が奥さん』といったライトサスペンスなホームコメディでも多分充分楽しい。

* それ僕が綺麗な光さんのストレートなイメージなんだけど、僕はもっと、設定とか話をひねりたい創り手なんで、こんな感じにしちゃう。

例えばこんな感じに：*

#迷宮の女神

妖精が殺害された事件が起こる。それじたい近年珍しい事だが、何とも異例なのは、犯人がどうやら人間らしいという事だった。妖精殺害という許し難い事件をただちに解決すべく最優秀捜査官として天からやってきたのが美しく光り輝く閃きの女神ウーガーだった。

彼女は、地上ではメグ・ライトと名乗って捜査を開始する。さすが閃きの女神なので、次々と謎をといて真相へ迫っていくが、最も怪しいその男に、彼女は女神としては感じたことがなかった初めての心の動揺を感じる。

「僕は殺したりしてない」

「でも妖精と触れ合える人間なんてそういないのよ」

「僕はあの妖精を守ろうと...それで」

「それで? どうしたの? 私の瞳を見て言って!」

男は、メグの瞳を見つめた

「結局...僕が殺したのと同じだ」

「... (この男、犯人じゃない...??) どうして?」

メグも男の瞳を見つめていた。

だがそのすぐ後、また妖精の連続殺害が起こる...

といった感じ。

*光さんからの《ミューズワード》が無いので話をまとめる焦点がないけど、例えばこんな、ファンタジック SF ミステリーのような感じのマジックリアリズムハードボイルドにしたいね。

(ややこしいかな笑) *

急いで書いたので、この冒頭はまだちょっと物足りないから、もうちょっと付け加えよう。

また妖精の殺害が連続で起こったことから、天は、最容疑者を取り逃がしたメグを信頼せずに、さらに神を外界に送った。メグの姉、復讐の女神メガエアがやって来る... そしたら大変なことになる。メガエアは真相など無視して怪しい者すべてを処刑してしまう苛烈な女神だ。... 彼が危ない...

閃きの女神は、一瞬で展開を予想する。真相解明の難題に加えて、彼を、姉=復讐の女神から守らねばならない。でも、姉は戦闘神だ、桁外れに強い... それに、メガエアに従う魔神四体は神を殺すことも出来る暗殺神である... でも、でも絶対に彼を守ってみせ

るわ、そして本当の犯人を必ず突き止めてやる！

と、三幕の中間くらいまで書いた方が、面白そうだね。(彼も、実は不思議な力を持っていて、出生にも秘密があるんだけどね...僕のいま脳内ではね。笑)

6月20日

追加

*綺麗な光さんが《ミラクル》というキーワードを投げってくれたので、《ミラクル》について考えてる内に、『迷宮の女神』のラストのイメージが広がってきた。
僕は、冒頭を作ると、だいたい同時に、臆げにラストも想像してるので、元々のイメージにはこういうのがあった...*

(ラストのイメージ)

: 死闘に次ぐ死闘の末...完全に二人とも死んでしまった... かのような結末の後、エンディングで何事も無かったかのように女神のメグ・ライトがエプロン姿で普通に若奥さんになって彼と暮らしている。その二人の会話で、そこに至るまでの空白の事情と、謎の答が鮮明になる。的なね

ここで光さんのキーワードが来たので、ラストシーンの二人の会話が鮮明なものになった。

: 上記のラストシーンから死闘直後の二人のシーンにフラッシュバックする。

姉復讐の女神メガエアの説得に成功したものの、姉の命令を無視した四体の凶魔神に追われ絶体絶命の二人。メグは自分を犠牲にして魔神と刺し違えるつもりで彼を逃して立ち向かう。最悪でも彼は逃げられる、と覚悟して突撃する。が..戻ってきた彼がメグを突飛ばし魔神軍に突っ込む...そして、

(爆風の中で二人は抱き合っている)

彼女「女神に奇跡を見せるなんて、何て奴なの。罰してやるから」

彼「どんな罰だって受けるよ笑。ん？ でも、どんな？」

彼女「こんな・・・（と首に抱きついて Kiss する）」

（kiss の後）

彼女「わたしにずっと居て欲しい？」

彼「うん。そしたら、毎日が奇跡だ」

シーンが戻り、エプロン姿のメグ・ライトが振り返り、
こちらに微笑かけた顔のアップで、END.

*という感じ。

キーワードを貰ってないと、着地点が視えないので、人物が消極的になり、話は拡散して浮遊してしまうが、テーマワードを僕が受け取っていると、展開に温かな血が通う。大きく違うから不思議だね。*

24 世紀のテレワーク

真っ直ぐな瞳さんのミューズワードは、

【テレワーク】だったね。こんな話になったよ。

2023年7月1日

《リモートでも愛なの?》という質問への答は、率直に言わずばり

離れてるのは、やはり《愛》じゃないと思う、で、

離れてる愛と愛はギザギザだからぴったり隙間なく、くっついてはじめて一つの《愛》になる

と僕は思う。例えば・・・

人は、誰しも何かしら欠落させているものである。反面で、何かを過剰に持っていたりする。そういう人と、人とが、めぐり逢うことによって、調和する一組になる場合は極稀だ。大抵は不調和なのが普通であるから、最初の頃はともかく、一緒にいる時間が長いほど、だんだんと亀裂がはっきりして一緒にいるのが苦行になるカップルのが多い。

そんな中で、反りがピタリと合う二人の場合は、反対に、離れている時間が長ければ長いほど苦行である。もっとも、そんな二人は極々ほんとうに稀にしか存在しないけれど。

そして、それは24世紀に入った頃の人間にとっても同じであった。

今や、能力が人類の平均値を大きく上回る〈高性能 AI を搭載したロボット〉による労働が主流となり、世の家庭では、夫婦が24時間一緒に暮らすのが当たり前であり普通であった。火星にはほとんどロボットが派遣されていた。

AI以上のスキルを持った少数の者も、遠隔操作でロボットを操作するテレワークで、やはり地球で家族と一緒に居ながら問題なく仕事ができる。神の手を持った外科医や、演奏家、寿司職人など、極少数の者でさえ遠隔操作によるテレワークで済んだ。だが、そのなかでも更に少数の選ばれた者だけは、やはりどうしても本人が直接現地へ行かなければならなかった。

瞳の夫も、そうした極々少数の卓越組の一人として火星に赴任している。

異なる分野の博士号を8つも持っているお陰で、1人で八人分働かせられるんだ、と夫は笑っていた。なので、ほぼ全家庭が同居している時代に新婚の瞳と夫は珍しい遠距離夫婦なのであった。

新妻である瞳は、夫が火星でどんな仕事をしてるのかよく知らなかった。自分もついでに行きたかったが、火星は今危険地帯と化していた。人類が火星に移動し始めた当初は順調だったが幾つか都市が出来て、そのまま発展していくものと誰しも思った矢先、異星人の思わぬ侵攻が始まったのである。火星は今は危険だった。

夫は、そんな処で、一体どんな仕事をしているのだろうか？ 瞳は心配であった。が、毎日、モニターで顔も観られるし会話もできる。それに、互いにソックリな、肌の質感まで再現したロボットが、互いの部屋に置かれており、それを遠隔操作して、室内を動き回ることができた。

夫はそれで、棚を作ったり、電気系統や水道管の補修工事などをしてくれたし、瞳もロボットで彼のために掃除洗濯や料理など家事をしてあげたりしていた。そして夜は、遠隔操作されたロボットが、瞳に甘い言葉を囁き手を握ってくる。そして優しく肩を抱き、首筋に Kiss を這わせる。そして心地よく胸を揉みしだく…、瞳はこれって何か違うなど思いつつ…

夫との夜の通信が切れ、瞳がスヤスヤと寝ついた時。ふいに、ドアが突然、ガチャガチャガチャと激しく動く音が響いた。無理やりこじ開けようとしている！

瞳が身構える暇もなく、三体のロボットが部屋に侵入してきた。

二体は室内を物色し始め、一体が瞳を襲ってくる。

高速で刃物を瞳に振り下ろす。

ガシッ！ とその腕を、夫のロボットの腕が抑えた。その瞬間、他の二体の侵入ロボットが一斉に振り返り、夫のロボに襲いかかる。

ほんの一瞬の出来事だったがナイフのロボは持っていた自分のナイフを首の隙間に突き立てられ、他の二体は、蹴りを受けて壁まではじき飛ばされた。二体が体勢を立て直す暇なく夫のロボが片方の首をへし折り、もう片方の腕を捻りあげてもぎ取ると、そのもぎ取った腕で頭を叩き潰した。一瞬で勝負はついていた。

夫のロボが、瞳の方へ振り返り「怪我はないかい？」と笑顔で訊いた。夫の声だ。

「遠隔操作だよ。テレワークで倒しちゃった笑」

腰が抜けそうになりながら瞳が訊く「アナタってこんなに強かったの？ アナタが...ロボが居なかったら私死んでたわ」

「夜、君の寝顔をいつも見守ってるからね笑」

互いの部屋をいつでもモニターできる 360 度カメラが両方に設置してある。夫はそれを見てくれたのだ。

「運がよかったよ。でも、何で襲われたのかな。心当たりがあるかい？」

「離れてるからでしょ」と瞳は、ここぞとばかり食ってかかった。日頃の不満が爆発する。

ここで、二人はめずらしく、大ゲンカした。

翌日、夫のロボが黙ったままドアのロックを治していたが、終わると「最強のセキュリティにした。これで僕と君以外は誰も入れない」

そう言ったきり、夫との交信は切れてしまい、その後しばらく二人は疎遠になった。

(寂しい)

そうか、ワタシも夫の寝顔を覗きみよう...と夫の部屋のカメラを点けた。...すると、夫が、瞳のロボットを抱いているのが見えた。我慢できないのね、と、自分が遠隔操作で応えようとする、操作ができない！ あれ？

画面の向こうでは自分のロボットが夫の愛撫に応じて、喘いでいる。

「何か声がいつもと違うね」

「ちょっと風邪気味なの、でも平気よ」

「...エエエエ、ちょっと、それ私じゃない。

私じゃないのよ、アナタ、アナタったら...ねえ、

ちょっと。それあたしじゃないよ」

とマイクに叫ぶが、

まったく通信が切れてしまっている。

私のロボットがハッキングされている (一体、誰?)

彼女は、怒りでモニタータブレットを床に叩きつけようとしたが、利発な頭脳が素早く回転した。もう一度タブレットに向かい、次の火星行特急便の予約画面を開いた。

予約決定のボタンをタップしようとして、ちょっと待って、彼の方から遠隔ロボを操作

してきたら、その時話せると思い直し、もう一度、彼の部屋の画面をみる。

そこでは、瞳のロボを夫が瞳だと思って熱烈に愛撫していた、そして瞳のロボではあるが（正体は誰か解らない相手が）熱く悶えている。遠隔操作は実感が薄いのは解っているし、実質的には全然浮気してるわけではないのだが、瞳は何か、やり場のない違和感を感じた。

そして、彼女は、もう一度火星直行便の予約画面に切替えると、今度は、予約ボタンを思い切り強くタップした。

予約は2ヶ月後だ。取り敢えず彼女は荷造りを始めた。夫の部屋をまたカメラで観るのは怖かった。夫の方から、連絡が来るのを待ったが、あれから夫のロボは動く気配がないし何の反応もしない。不安が雲のように広がっていった。

相変わらず暗雲がかかったまま1ヶ月が過ぎた頃である。

とつぜん、夫の職場の上司から緊急連絡が入る。

「彼が失踪した...、別に女が居なかったか？」と訊かれた。「殺された可能性もある」という。

「分かりません、私には何も。一体何が、何があったんですか？」

「奥さん、何があってもお気を落とさずに。詳しい事はあとでまた」

そして、その後は、何の連絡もないまま日々が過ぎた。

ある日の夜、瞳はソファに腰掛けて独り、呆けたようにテーブルに置かれたキャンドルの灯を見つめていた。何かを考えていたわけではなく、むしろ心すら何処かへ行ってしまった気がする。

すると突然、玄関のドアが、ガガガチャッガガガチャッと再び大きな音をたて始めた。

（今度は誰にも開けられない筈だ）

だが、鍵はあっけなくすぐにピーンという音をたて簡単に解除された。

（リビングに座り込んだままの瞳は心臓が凍りつく）

...扉が大きく跳ね開けられた。

「やあ、元気？」

突然入ってきた夫は、手に大きな花束を抱えていた。

「心配でさ。居ても立ってもいられなくて仕事を放り出して戻ってきた笑。

それに誕生日だろ、今日は君の。ちょっと時間が過ぎちゃったね」

「馬鹿馬鹿馬鹿...バカバカバカ...」飛びついて叩きながら、

喜んだ顔で泣きながら怒る瞳。なんだかすべての感情が爆発してしまった感じだ。

彼はしっかり抱きしめて、彼女に Kiss した。

「私、火星行の予約しちゃったよ」

「じゃあ、それに乗って向こうへもどるよ」

「ヤダ！ もう行かないで...」

「...そうだな。もう離れ離れはよそう。

ずっと一緒がいい。もうこのままずっと離さないよ」

この強く優しく包むような抱き方は、まさしく夫だと、実感を持って瞳は抱きしめ返した。

／ END

後半、3つある謎を回収する1コマが脱落していた。

それが無いと、ラストのハッピーエンドがすっきりしないと思うので。

(以下簡単に説明で補足しておく)

3つあった謎は：

- ①夫の仕事は何だったのか？
- ②ハッキングしたのは誰だったのか？
- ③上司から連絡が来た背景は？

：であるが、以下順に説明しよう。

①夫の仕事は：秘密諜報部員

火星で007 = J・ボンドのような仕事をしている

②ハッキングしてたのは：異星人の女スパイ

敵が油断させようとするのを、夫側も油断してるフリをして、相手が誰か探っていたが

抱きしめたときロボが突然ナイフで襲ってきた。瞳の姿なので反撃がし難く、肩を斬られ

その血痕がベッドに多量に残った。

③上司からの連絡は：

夫の消息が途絶えたので、情報機関が捜査を開始し。ベッドの血痕から死亡の線。

瞳ロボの通信元が妻の瞳でなく別の女であったことから偽装的な失踪の線でも調査していた。

妻の反応を打診するために為されたのがアノ上司からの連絡であった。

＊

夫はいち早く行動を開始しており、地球にいる妻が襲われ、自分も襲われた事から、敵が異星人の特殊な暗殺機関である事を察知して、妻を守る事を最優先にして帰星したのであった：(以上が背景の補足)

尚、

火星から帰るには1ヶ月は短すぎるようだが、夫は、異星人の特殊な高速宇宙船を奪って戻って来たので、その点は問題ない。説明が抜けていたので補足する。

明日よりも向こうへ

ミュージワードは「明日」

2023.0704

(あらすじ形式で書いてあるが、読むと物語になっている。)

** 明日よりも向こうへ **

** 響 真音** (ヒビキマネ)

：ヒロイン。大金持ちの令嬢だが、6歳の時に貰われてきた。邸宅には16歳の義姉がいたが本当の妹以上に真音のことを可愛がり守ってくれた。真音が大学に入った時に姉は外国に嫁に行ったが、真音が卒業して報道記者になった頃から全く連絡が途絶えていた。それが突然、帰るという知らせが入り、ともかく喜びに溢れた真音が空港に迎えに行くと、そこにはまだ幼い6歳の姉の娘だけがいた。

そして手紙を差し出す。見ると「この娘がこの手紙を渡したということは、もう私は死んでいる。真音、この娘を守って。お願い！」

という走り書き。姉の字であった。「お姉ちゃん」と言って縋りついて来た6歳の姪はかつての自分のようだった。

** 幼い姪 **

：姉の面影を残す6歳の姪を、真音は引き取って育てるが、二人で暮らし始めてすぐ、不審な男たちに何度も襲われるようになる。

姉の夫は考古学者で、裏で秘宝の盗掘が専門だったことが徐々に解ってくる。そしてなんと、姪の身体の中には、数千年前の古い神像から外された《特殊な霊力のある》貴重な宝石が埋め込まれて秘匿されていた。

神像を崇拜する秘密教団が総力を上げて姪を狙ってくる。真音はそれら全てと戦わなければならなくなる。だが、真音は必死にやってみるだけなのに、どういうわけか、武器や戦闘を巧みにこなしてしまう自分に驚く。

だが、激しい戦闘に巻き込まれ姪が死んでしまい、真音は気絶する。奪った死体を解剖した教団は、宝石が姪の身体に始めから無かったことを知った。

** 第二部 **

実は、宝石は、真音の身体の中に埋め込まれていたことが判る。幼少期に誰かが埋め込んだのだ。それを知った姉が教える為に帰国しようとした途次を教団が襲い、6歳の少女の身体に宝石があるという情報だけが誤って独り歩きしたのだ。こんどは、自分が謎の教団に狙われることになる。だが、入院中の真音には戦う力が残っていない。このままではみすみすやられてしまう。今日は誕生日だというのに、命日になってしまうのかしら…。

** 謎の男 **

そこに、謎の男性が現れ、真音を救助する。彼は強くて頼りになった。だが真音を命がけで守ってくれるのに、とても態度が冷たかった。「俺は君を守ってるんじゃない。その宝石を守護するために生まれたのが俺だ。君の中の秘宝の為だ。誤解するな」そう言いながら、男は、真音のことを守っているとしか、思えない行動をとるのであった。

** 宝石 **

嵌め込まれていた神像は<戦神>であり、その宝石には<必ず勝利をもたらす>神秘的な力があるとされる。数千年の間それを受け継ぎ信仰する秘密の暗殺教団はかつてそれを悪用すべく奪った者達の子孫であり、元々の宝石の持主であった宝石の守護者の一族の末裔が、謎の男であった。

それが、今、真音のカラダの中に埋め込まれている。それを持つ者は、アグレッシブな性格が増長する。

その宝石を思い切って捨ててしまえば、心は平穏に戻り、平和と幸福が君を包むはずだよ、と謎の男が、眠っている真音に言ったのを、真音は目を閉じたまま本当は聞いていた。

** 教団からの刺客 **

暗殺教団から次々に特徴のある刺客が送り込まれて来たが、すべて真音と彼女を守る男によって撃退される。とうとう、幹部クラスの最強の刺客5人が一度に日本へやってきた。彼らは功名を争って、まずは自分が二人を抹殺しようと、それぞれに部下を指揮して巧みな作戦で罠をかけようとするが、二人はその罠を見破り次々と突破してゆく。

** 5人の大幹部 **

部下をすべて失った幹部五人は、単身の刺客としても暗殺教団のトップクラスだ。それが五人手を組んで、二人に最終決戦を通告してきた。遮蔽物が何も無いただの広い草原を決戦の場として指定してきた。明らかに、二人には不利だ。罠であろう。だが、真

音の守護者である男は言う

「これで一度に、憂いを払拭できるよ。逃げずに決戦に応じよう」

「でも、そんな場所では、やられる確率の方が高いんじゃないの？」

「なあに、心配ないさ。その勝利の宝石が、君の命を必ず守ってくれる」

** 決戦 **

広い草原に二人はやって来た。周囲にはまだ誰の気配もない。守護の男はリュックサックを背負っている。「まるでピクニックみたいね」と真音が笑う。「ああ、7人で集まってピクニックさ」と男も皮肉に笑う。男がリュックから手榴弾を沢山取り出して、彼女の足元に置いた。「閃光弾だ。気配を感じたらこれを構わずに次々と投げろ。周囲の人間は皆めくらになる。君はこのゴーグルを付けてれば奴らが見えるから狙い撃て」そう言うと、更に銃をひと山、彼女の足元へ置いた。男は自分たちの後ろにテントを一つ張った。

待っているとやがて、微かに気配がした。男の顔が緊張する。敵が来たらしい。二人は草原の真ん中に立っていた。まるでみずから囿になるように…。だが、一向に敵は攻めてこない。

一時間がそのまま経過した。何も起こらない。普通の者ならその緊張感に耐えられないところだが、男は静かにじっと立っていた。そして真音がつい動きそうになると（待て）と手で合図する。唇を動かさずに言う《奴らは罠だと思って狙撃をためらっているんだ。撃てば位置を悟られる。俺たちがダミー人形かどうか伺っているんだ。だから動かさずに、奴らが動くのを待て。必ず、揺さぶりをかけてくる。その一瞬がチャンスだ》。そしてまた静寂が続いた。

やがて、バイクの爆音がし、四方から4台が猛然と突っ込んできた。そして円を描くように二人の周りを猛スピードで距離を取ったまま周る。真音が閃光弾を続けて放る。がよくみるとバイクの四人も真音と同じゴーグルを付けている。そこに更に巨大な戦車が一台あらわれ、突進してくる。

と、その瞬間、なにかが空を翔けて行き戦車に何かを放ると、戦車の頭が吹き飛んだ。他にも二台のドローンが高速でバイクを追って飛んでいる。小さな機関銃が付いていて、バイク二人がたちどころに始末された。だが、残る二台のバイクが、真音に向かって突っ込んでくる。真音は夢中で銃を連射した。

.....

草原の真ん中で、真音は眼を見開いたまま大の字に倒れていた。
「まるで死体のようだな」足音が頭に近づいてきて、そう言った。
守護の男が、ポロポロの姿で笑って立っていた。
「もう沢山だわ。こんな戦いに明け暮れる毎日なんてまっぴら」
「俺は平気さ。小さな頃から、ずっと独りで戦い続けて生きてきたからね」
「もうだめ。一步も動けない。ムリよ」
「腹がへってるせいだよ、きっと」

** 最後 **

宝石を守る聖者の血を引く、義姉や、この謎の男と一緒にいる時だけは、真音の心にやすらぎが流れるのを真音じしんがずっと感じていた。幼い頃は姉が、今はこの男と居ると安らぐ。この人となら、明日を超えて、明日よりももっと向こうまでいけるかも知れない、そう思う。

「この宝石が体内に在る限り、貴方はずっと私を守ってくれるんでしょ？」
「どうかな。君を眠らして、手術で取り出すことだって出来るよ。ほら、この毒入りおにぎりをどうぞ」

草原に腰掛けて、謎の男が差し出したおにぎりを、躊躇いなく頬張った真音の肩に小鳥がとまり、チュンチュンと話しかけた。ンンウンと返事しながら、真音は（本来なら、わたしは、平和で穏やかな、こんな心でずっといたいのかも知れない）と思った。涙が流れたのは、好物の具が入ったそのおにぎりが思った以上に美味しかったからかも知れない。

／ END

33度目の真実

ミューズワード：「三十三度」

6月28日

** 33度目の真実 **

** *

有能な美人キャスター千嵐秋子（ちらんあきこ）は仕事柄、最新の情報に触れる機会が多い。最近もっとも彼女の関心を引いたのは〈恋愛アクティブラーニング〉と呼ばれる、自然に最良のパートナーを選ぶ眼が出来、その人の最高のパートナーになる現実的なスキルが自然に身に付けられるという画期的プログラムだった。

最初は眉唾ものと思ったが、たまたま友人の一人がそれを試して成功し、大絶賛したのと、現実とその友人の魅力が大きくUPしたのを目のあたりにして、秋子もそれに申し込んでみようという気になった。恋愛ACLの担当スタッフの説明は至極シンプルであった。

「33度です」

とそれだけなのだ。

「33度目に理想のお相手にめぐり逢えます。貴女の場合は、33人目。そうAIが弾き出しました。ですから、当会では33人までは男性を紹介いたします。それで経験値を積んで下さい」。

え、要するに〈33回男を試すことができる恋愛プログラム〉ってこと？

結局最後の人なんだから、そんな無駄じゃない、と秋子は思う。それに、最後の理想の相手が清楚な女好みだったら台無しじゃないのよ、と。

彼女は、せっかちなので、あっという間に32人のお見合いを済ませた。実際、芯が信用できない男ばかりだったので、せっかちはより加速していった。

すると、せっかちになりすぎたのか、

彼女はオカシナ夢に悩まされるようになった。

眠ると必ず〈明日のニュースを読んでいる自分の夢〉を、みるのだ、しかも毎日である。そして翌日、みた夢と全く同じニュースを現実でも全く同じ様に読んでいる。どうなってるの？ そんな奇妙な毎日が続いた。何なの一体？

その日も彼女は夢のニュースで「昨日深夜3時頃、都内のアパートで女子大生が帰宅した所を...殺害されました。犯人は依然逃走中です」（又だ！）ハッと目覚め、時計を見る。深夜1時25分。あれはこの近所だった、あのアパートの建物なら知ってる...。でも殺人事件。怖い、でも助けられるかも...

現場へは一人で行った。恐ろしいので遠くの物陰からアパートの入り口を見張った。まだ女子大生は帰宅してない筈。と思った時、女の悲鳴がし、スーツ姿の男が一人、飛び出して来た。遠くからだが、秋子はっきり男の顔を見た。心臓が口から出そうだった。男は左右を見回すと走り去った。

あ、あれが犯人...

二度と忘れない顔だった。知的で端正な顔に精悍な眼。洗練された靱やかな身のこなし。彼女の理想のタイプであった。あの男が犯人...

(ワタシこんな処で何してるんだろう。結局、被害者を助けられなかった...)

翌日、気が動転していたが、平常心で生放送に臨まないと...控室で一人、そう思っていた時。電話が鳴った。恋愛 ACL からだ。

「本日、33度目のお相手が決まりました。いつお会いになりますか？」

「こんな時に？」

「後になさいますか？」

「いえいえ、いいわ会います。今日逢います」

せっかちな彼女は善は急げで、その日の夜に逢うことに決めた。

番組開始。隣の男性キャスターの話がいつも以上に空々しく聞こえた。あの殺人事件のニュースをあの夢の通りに読んだ時も半ば心は何処かへ飛んでいた...(思い出したくない、という思いと、生放送の緊迫感のなかで、脳が機械のように白紙になった)それに、いよいよ今日、最後の一人、運命の人と逢えるのだという喜びで心は燃えていた。

弾丸のように彼女がレストランに到着した時、
相手の男性はもうすでに来ていた。
彼女が澁刺とした声で男の前に回り「はじめまして」と挨拶した時、そこにあったにこやかな顔は、上品なスーツ姿の...アノ端正な顔だった。
「はじめまして」
その顔はあまりにも爽やかに微笑んでいた。

「僕の方は貴女のことをよく観てましたけど、貴女は僕を見るのは今日が初めてでしょ。
これからは貴女に僕のことを何もかも誰よりも知って欲しいな。その勇気が有りますか笑」

立ち尽くす彼女は、この後、どうするのだろうか??

*

to be continued ... という感じ。

(果たして彼は犯人なのかな...)

* 6月29日 追記

(以下、つづきをちょっと書いとう)*

3 3度目の真実 — (2) —

「アナタ、人を殺しておいて、恥ずかしくないの？」

言うと同時に、秋子は卓上のグラスを取って男の顔へ水をぶっかけた。

男はもろに浴びながら、続く秋子の怒声も浴びる。

「自首しなさいよ、私が警察に行くまえに」

「僕は犯罪者じゃない。何か勘違いしてるよ」

「フン、私みてたのよ。アナタが慌てて飛び出して来たところを。ここに目撃者がいるのよ」

男の眼が、瞬時に鋭くなった。

「あそこに君も居たんだね」

男は、ほんの瞬間ちょっと考える顔になった。

「そうよ、もう逃げられないわよ！」

ニヤッとした男は、ゆっくりナプキンで顔を拭いながら、微かに笑い、「まず誤解を解いておこう」と、内ポケットから名刺を出して彼女に渡した。

「僕は、東京地検特捜部の検事だよ。」

名刺を受取り、あらためて男を見た秋子は、犯人じゃなく検事の方がこの男には合ってる、と内心思った。「それでも犯人じゃないという保証はないわよ」「僕は昨夜、ある世襲議員を追っていたんだ。警察も動き渋る奴でね。あの場面に出くわしたのは偶然だ。慌てて奴の後を追ったが、見失ってしまった。君が見たのは、その時の僕だろう」と男は眼で秋子の反論を待った。

「それが本当なら... (急に顔が赤くなる) 水をかけたりしてゴメンなさい。... この名刺が本物ならだけど...」

「ふふ、君は勇敢だね。僕を犯人だと思った瞬間は、凄く怖かったろうに。水をぶっかけるんだから笑。...ところで、君の方は、なぜ、あの現場に居たんだい？ あんな時間に。それも独りでだろ」

「それは...、その...あの、...」

... (あれは予知夢のせい、だなんて、言えるわけない)」

秋子の眼が思わず狼狽し。涙が浮かんだ。

「答えによっては、君を逮捕しなきゃならない。なぜ、君は あの時あそこに居たの？」

男の眼は、優しいが鋭く秋子の眼を見ていた。

という感じ

.....(続き)

33 度目の真実 — (3) —

「アナタの事を、誰よりも、何もかも、知る勇気があるかって私に訊いたわよね...

アナタは私の事、知る勇気はあるの？」

「何でも言ってごらんよ。僕が運命の人かどうか試してみたらいい」

「.....」

「世界で一番信頼できる男。そう書いたんだろ？ ACL の理想の男の欄に」

「どうして、それを知ってるの？」

「仕事柄、事実を突き止めるのが得意でね」

「アナタは、何て書いたの？」

「秘密」

「狡いわ。そんな自分だけ」

「イイ男が 30 人以上言い寄っても、全部素っ気なく振るような女がいい。そう書いた笑。今日、そういう人が一人だけ居ました、と連絡があったんで、逢うのを愉しみにして来た」

「ただ頭のイカレタ変な女なのかもよ」

「フフ、法律家はね、物事をつねに両面から観る。一つの観念に固執はしない。それでも僕は、何が正義なのかという点だけはどんな難しい場面でも見失わないようにしてきたつもりだ」

秋子は、うつむいて、しばらく黙っていたが、顔を上げると、男の眼を正面から見返して言った。

「・・・、予... 予知夢を..みたのよ」

力の抜けた声だった。よりによってそんな嘘を、という相手の顔を予想した。

だが、彼は全然そんな顔をしなかった。それが彼女の瞳を輝せた。

「予知夢をみて、君はあの時間にあの場所へ行ったんだね」

嘘のない秋子の瞳を、むしろ好ましそうに見つめ返しながら彼は優しい声でそう言った。

「お互い、知らなきゃならない事が沢山ありそうだ。笑。バラバラに時間を過ごして来たんだから当然だ。もし僕達が運命の二人なら、これからは段々と二人で同じ時間を過ごすようになるだろう・・・。まず最初は、ほら、座って一緒に食事だ。胸は一杯でもお腹はすいてるだろ？ 食べながら話せばいいよ。君の事情と、不安もね」

「そうね、そうするわ。腹が減っては戦はできないっていうから。まだ貴方を検事だと信じたわけじゃないから、いい。甘くみないでよ。正体を言うなら今のうちよ」

そう言いながら、二人はもう親しそうに笑っていた。

.....(続く).....

〈ムーングラス〉と〈スターグラス〉

ミュージワード：【メガネ】from ルンさん
(2023.07.11)

人気モデルでタレントの虹田ルコは、急に時間が出来たのはいいが、炎天下のなか猛暑で喘いでいた。

ともかく熱さから避難しなくちゃ、とエアコンの効いてそうな建物の中に入った。そこは大きな図書館だった。

取り敢えず汗が引くまでと思い、ひと気のない涼しい隅の方へと、書棚を眺めながら通路を移動していく。

行き止まりの暗い一角は、人が誰もいない。ここは落ち着きそうだ。古い文学全集が集められて並んでいる一角だった。ルコはそこでやっと涼しさに一息いれる。テキトーに一冊出して開いてみた。古書特有のもつ懐かしい感じの匂いを感じる。すらすらと読んでみたい気がしたが、つまらないし本が重いので、すぐに棚に戻した。

と、その一角に落ち着いた雰囲気のある男が独り静かにやってきて、ルコと少し離れたところで棚をみはじめた。若く見える。だが19世紀の英国風な背広を着ていて、変わった眼鏡をかけている。その男は、棚から一冊取り出すと優雅に最初のページをめくり始めた。めくるのが恐ろしく早い。

あっという間に一冊見終わると、また一冊出してめくり始める。そしてまた、あっという間に全てめくり終わると、またつぎの一冊を・・・

ちょうど大人が、幼児用の薄い絵本を一冊読み終えるような速度で、分厚い全集を一冊読んでしまう感じだ。ルコは思わず訊いた。

「まさか、読んでないですよ？ お札でも挟んどいたとか...？」

男は、ハッとしてルコを見た。さらに一瞬驚いた顔をする。そして明るく笑った。歯が白い。

「読んで、というより読めちゃうが正解かな。でも僕じゃなくてね、この眼鏡の力なんですよ、読めちゃうのは」そう言って、本を閉じてルコを見た男の眼の輝きが、雷のようにルコを撃った。思わず顔が真っ赤になる。

＊

「じつは僕は、アンティーク眼鏡のセールスマンなんです。この鞆がケースになっていて、開けるとほら、けっこう沢山入っているでしょ、宝石みたいに」

男は棚の傍にある椅子に腰掛けて、膝の上で鞆を開けてみせた。変わった一品物の眼鏡がお洒落にびっしりと並んでいた。どれも見たことの無いデザインだが、センスは悪くない。

「ここにあるのは、ただ視力を補う為の眼鏡では無いんですよ。みな、特殊な機能をもった眼鏡でね。売り物というより僕のコレクションのような感じです。ここにあるどの眼鏡も皆、長い歳月を経るなかで、いつしか眼鏡じしんに、かつての持主が持っていた願力が乗り移り、特殊な機能が備わったものです。不思議でしょ？

例えば、ほら、

これは、長年古書店の主人が代々愛用してきた眼鏡です。持主は、英国、フランス、そして日本の神田と移ってきて、とても年季が入っています。この眼鏡をかけて、書物の背表紙を見ると、高価な本、名著、駄本が、一目で判ります。名著は表装が豪華に見え、駄本は紙くずに見えます。新刊書でも、将来残る本か、駄本か、同じように表装が違って見えるんですよ」

ルコが借りてちょっと図書館の中を見渡すと、たしかにその眼鏡をかけた彼女には、棚の中で豪華に輝いている本と紙くずの束との識別は容易だった。「うわ、スゴイ」

「さっき、僕がしていた眼鏡は、ある批評家がかけていたのを最近入手しましてね。試しに僕自身がかけてみたんですが、貴女がご覧になったように、速読しつつ的確に要点が把握できる、神のような眼鏡でした。文学全集のだらだらしたページが、この眼鏡をかけて読むと、要点だけの数行の纏まりになって、わかりやすくメリハリよく展開していくんです。不思議ですよ」

「それじゃ、これは？ それとこれは？ どんな機能があるの？」

ルコは、自分に似合いそうな眼鏡を二つ指さして訊いた。機能によっては買ってもいいと思った。

「ああ、それとそれですか。各国の貴婦人と女優が愛用してきた眼鏡です。こっちは、かけると、どの女を見ても遥かに自分より美しく優れて見える眼鏡です。美点が拡大されるのです。

そっちのやつは、反対に、かけると、どの女を見ても遥かに自分より醜く劣って見える眼鏡です。難点が拡大されるのです。

どっちか、気に入った方を差し上げますよ。どっちにしますか。貴女がかけたいと望む方を選んでください。お好きな方をどうぞ。どっちがいいですか？」

*

ここまでが冒頭。
(さて、どっちにする?)

続きはまた後でね。

<つづき>

ルコは、そう言われて眼鏡をあらためて見比べてみたが、装飾的には両方ともよく似ている。ただ、片方は金色の月が、他方には銀色の星が、刻まれているのが違うだけに見える。ただ、機能は真逆である。

「周りが皆んなブスに見える方にします」

「だって、周りののが美しく見えるんじゃ、絶対、落ちこんじゃうから。周りが自分よりブスに見える方が元気が出そう」

「では、こっちの星の眼鏡を差し上げます、どうぞ」と男は眼鏡をルコに手渡した。「もしも...、その眼鏡に不都合があったり、返品・交換・修理などのご要望が生じたときは、こちらにご連絡を」そう言って男は名刺を残して去っていった。後ろ姿が見惚れるほどスマートだった。

さて、ルコは早速、プライベートでも仕事場でも、貰った眼鏡をかけてみた。そうすると、周囲が一斉に爽快なほどブスになった。特に像が歪んで視えたりするわけではない。相手の短所が微妙に強調されて見えるのだ。眼鏡をかけていると自然とルコは勝ち誇った気分になれた。ちょっとひけめを感じていた美女さえ、それで見てみると。どうなるの一体？ すると、やっぱり、みごとにその美女の短所がクローズアップされてちゃんと自分よりも遥かに、小気味いいほどブスに見えた。思わず「フフ」と嘲りの嗤いがルコの口から漏れた。

ところが、しかし、その眼鏡をずっとかけていると、なんだか胸がつかえたような気持ちに段々なりはじめた。当初は無邪気に優越感にひたっていたけれど、それは所詮、現実を歪めているだけだ、という思いが、ルコの中で拭えなくなったからだろう。時々、強く落ち込んだ時に取り出してかける事はあったが、段々、ルコは周囲がブスに見える〈星の眼鏡〉をかけなくなった。周囲の欠点ばかりが目につくのが嫌になったのだ。

(そうだ、相手が美しく観える眼鏡、あの月の眼鏡をかけると、どうなるんだろう?)
むしろ、それが、無性に気になり始めた

*

「では、またあの図書館でお会いしましょう。今度は文学全集の棚でなく、哲学全集の棚の前で」

ルコが名刺にあった携帯番号へかけた時、男はそう言って、そっけなく電話を切った。ルコが指定された場所に行き、何となく手持ち無沙汰で、『プラトン全集Ⅰ』を手に取り、テキストを開いた頁にあった〈汝自身を知れ〉という言葉に眼が留まったとき、「やあ」と、例の眼鏡をかけた男が、振り返ったルコの顔を見て、明るく笑った。歯が白い。

「なるほど。では、こっちの眼鏡と交換ですね？」

「いえ、無料じゃ悪いです。そっちのは買います。おいくらですか？」

「.....。分かりました、ではお売りしましょう」

男は代金を受け取ると、二つの眼鏡をセットで収納できる洒落た皮製のケースに入れて、その〈月の眼鏡〉をルコに渡した。

そして、去っていく時、「また不都合や修理などご要望があればご連絡ください」と言いながら、最後にこう付け加えた。

「...もしその眼鏡をお売りにしたい場合は、当方で、売値の半額で引取らせて戴きますが、その二つセットであれば、今日貴女がお買いになった値段でそのまま引き取らせ

て頂きます。では、失礼します。御機嫌よう」

＊

ルコは早速、周りが全て美人に見えるその〈月の眼鏡〉を試してみた。すると、その威力があまりにも凄すぎて、かけていて一気に凹んでしまった。〈星の眼鏡〉をかけた時の優越感の反対が襲ってきた。ずっとこの眼鏡をかけたまま立ってられない程、心が打撃を受けてしまう。周囲の女が皆、自分より綺麗に見える…。あのブスが、と思っていた相手ですら、この〈月の眼鏡〉で見ると圧倒的な美点が強調されて見えた。

相手の美点が強調される程、なぜか自分の欠点が巨大に感じられて、いたたまれない気持ちになるのだ。で、ルコは、月の眼鏡をかけると、どうしても耐えられなくなり、すぐに反射的に外してしまう。眼鏡を外せば、視界に圧倒されないからだ。

(そうだ、圧倒的な美女と二人きりになって、相手にこの〈月の眼鏡〉をかけさせて、自分は相手をこっちの〈星の眼鏡〉で見てもいいや。相手はこっちが圧倒的な美女に見えてさぞや凹むことだろう) …そんな邪な企みが、ふとルコの心に過ぎった。

或る日のこと、特に美しい女性たちが大勢集まる仕事があり、そこで、ルコは、相手がブスに見える〈星の眼鏡〉と、相手が美女に見える〈月の眼鏡〉を、交互にかけては外し、かけては外して、密かに一人で遊んでいた。片方の眼鏡をかけると、一斉にブスばかりになる。で、もう片方の眼鏡で見ると、一斉に物凄い美女揃いになった。その景色の不思議な変化を、ルコは繰り返して、一人面白がっていたが、

ふと、その極端な二つの景色の間に、もう一つの景色があることに気づいた。眼鏡をつけていない時の景色だ。これも、また一つの景色だった。ブスだけの景色、美人だけの景色、の他にもう一つ：ブスも美人も平凡な人もいる景色：がそこには在った。

(眼鏡を外しているのに、まるで、別の眼鏡をかけてるのと同じ…ってこと?…)

眼鏡を付けた外したりしているルコを見つけて、美しい女優が一人近づいて来た。「へえ、面白い眼鏡ね。オシャレ〜♪。ちょっと貸して」

女優はよりによって〈星の眼鏡〉を手を取った。相手がブスに見える眼鏡だ。ルコが制止する間もなく、それをかけて女優はルコを見た。

その途端、女優の口元が歪み「フフ」と嘲りの嗤いその口から漏れた。そして、眼鏡を外すと、

「なぁんだ、普通のメガネじゃん。つまんない」そう言うと、勝ち誇ったような笑みを浮かべて、ルコを横目で見ながら、ツンとして立ち去った。

＊

「二つともお売りになるんですね？」男は確かめるようにルコの眼を見て訊いた。

「もう必要ないから」ルコの綺麗な眼が、一段と澄んでいるのが、心に揺れない証拠にみえた。

「では、これが買い取りの代金です」

図書館で私語は厳禁だが、その静かな一角はいま二人の他には誰も居ない。

男は、ルコが購入したとき渡した代金が入った封筒をそのままルコに返した。

「何だか、ふつーに返品しただけって感じ。商売にならなくてすみません」

「貴女のその瞳が、今回は僕の報酬ですね」

「損しちゃいましたね。」

アタシ、その二つの眼鏡をかけた外したりしての内に、突然、気づいたんです。

人間って、特殊な眼鏡を元からかけてるようなものかもな、って。

だから、特殊な眼鏡をかけるより、自分の眼鏡を外すことが大事じゃないか、ってそう思えたんです。眼鏡屋さんには何の得もない話なんでアレですけど…」

「そんな事ありませんよ笑。初めから、タダで差し上げるつもりでしたからね。」

最初に出逢った時のことを覚えていますか？

どうして僕が、初対面の貴女にタダで眼鏡を差し上げたのか、判りますか？」

「アタシが有名人だと解ったから？」

「いいえ、笑。」

あの時、僕は批評家の眼鏡をかけていたでしょう。あの眼鏡は、本を読むときは、その要点と急所が視えますが、あの眼鏡で女性を覗いたときは、その人の内面が容姿になって見えるんです。この眼鏡で女性を見ると、実は、美しく見える人はけっこう少ないんですよ。かなり綺麗びやかに飾った美人でも、この眼鏡をかけて見ると、魔法使いの醜怪な老婆の姿に視えたりしてね笑。

(男は、その眼鏡を取り出して言う)

これは、魂の姿が、容姿になって観える眼鏡なんです。

最初逢った時、僕は、この眼鏡をかけていて、そして貴女を見た。覚えてますか？
その時、貴女の姿は、とても美しい姿だったんです。とても健気な魂を持っていると思いました。
それに感動したんです。

だから、初めから、報酬は期待していません。この眼鏡で観たときに、美しい姿のままの貴女でずっと居てください」白い歯が見えた。では、と男が立ち去ろうとすると、

「待って。その眼鏡をください。その批評家の眼鏡を売ってください」

男は振り返ると、かけていた眼鏡を外してたたみ、皮ケースに入れて、ルコに手渡した。
「どうぞ。差し上げますよ。これで、沢山 本を読んでください笑」
そう言って、優しい眼でルコを見つめ、爽やかに片手を上げると、二本指を自分の額にあててからサッと外側に振る軽い敬礼の仕草をし、ウインクして去っていった。「何かあればご連絡を」と言い残し。見惚れるほど端正な後ろ姿で。

ルコは、いま貰ったばかりの〈批評家の眼鏡〉をケースから取り出し、出逢った時、男がかけていたのと同じ様に自分もかけてみた。自分の眼が彼の眼になったような気がする。そして、手近にあった難しそうな本を棚から一冊取り出して読んでみて、初めて気がついた。(アレは...彼の視力そのものだったんだ...)

彼がかけていた〈批評家の眼鏡〉は、伊達メガネの様にフレームのみで、レンズが入っていなかった。彼の眼には初めから何ら特殊なレンズなど嵌っていなかったのである。

／ END (2023.0713)

V DEEP HORROR マノン～螺旋の愛～

プロローグ

ミュージワード「食」

(テイストは「ホラー」で) from マノンさん

* (2023.0714) *

(プロローグ)

夜でなくても夜のような道。車一台やっと通れるくらいのその小径は、晴れた日でもつねに雨に濡れたように暗くジメッとしていて、つねに冷んやりしている。歩く者は一歩ずつ暗い気分になっていく。その黒い小道がずっと続く向こうに、世の中の全てから隔絶するようにして、ひととき豪華だが限りなく陰湿な古い洋館が一つ建っていた。昼間でもそこに近づく者は誰もいなかったが、もし誰かが、怖いもの見たさで、夜中、洋館の裏手に回って、バルコニーの有る方ではない、隣の奥まった部屋の窓を見上げたら、そのガラス越しに、はっきりとではないが、薄っすらと微かに灰白んだ美しい女の影を見たことだろう。

薄っすらとしか見えないのは、建物を包むように不思議な霧がたちこめているせいもあるが、それ以上に、窓の内側がいつも冬のように蒸気ですっかり曇っている為である。だがそれでもそこには、薄っすら、憂鬱そうにじっと窓に凭れていたたり、ヘビのように揺らめいて激しく動いていたたりする、確かにどこか美しく思える女の影があった。

彼女が実は幽閉されているのか、ただ閉じこもっているだけなのか、そうした事情も、中

と、その時、その曇った窓に、中から女が指をあて、すうっと線を引いた。

《わたしはマノン》

窓にできたその透明な文字の部分から、恐ろしいほど楽しそうに微笑んでる赤い唇と、愛らしく輝る女の瞳がはっきりと見えた。その瞬間、空に大きな雷の轟きと稲光りがし、一瞬にして窓も館も豪雨に包まれた。

(ある古寺)

泥濘んでいて歩くのが不快な道を、もうどぶどぶになった靴で2時間以上歩き続けてようやく辿り着いたその古寺で、東京から来た民俗学者だと名乗ったその男は、不思議な感じのする尼僧に出迎えられた。中年だが尼にしては何処かしら艶っぽい。いま住職は不在で、自分ともう一人の尼で留守番しているところだと言った。

男は濡れた衣服を脱ぎ、出してもらった臨時の浴衣に着替えて、ほっと座敷で寛ぎながら、さっきの尼のことを考えていた。すると、襖がスーと静かに開いて、後ろ姿で尼が部屋に入ってきた。「お茶を…」と微かな声だったが、かなり嘎れているのが判る。もう一人の方の尼であろう。それが振り向いた瞬間、男は思わずギョッとした。

(両目が火傷に覆われている) 頬から下半分は、さっきの尼によく似ており色白だし老人ではないが、頬から上半分が額まで完全にケロイド状に焼け爛れている。皮膚が癒着してとても臉を開けられないだろうし、眼球も完全に損傷しているだろうと想像できた。(痛ましい) その盲目の筈の尼が、両手で茶碗の乗った茶托を捧げるようにして、男の前に差し出した。

あっけにとられた男など無視して、盲目の尼は静かに部屋を退出していった。足も悪いらしく、片足を引き摺りながらゆっくりと、だが真っ直ぐに歩いた。
...何となく、お茶までが不気味に思えたが、喉の渇きに耐えられず男はそのお茶を啜った。変な味ではなかった、むしろ美味しい。だが、最早その美味しさが不気味であった。

と、そこへ、最初に逢ったあの尼が入ってきた。
「さぞ、驚かれたでしょう。あの人は、無音(むのん)さんと言いましてね、私の妹なんぞで御座います。ああなる以前から無口な性格でしたが、ああなつてからは一層、暗く無口になってしまいました。なので、滅多に人前に出ないのですが、時折、今日のように、お茶を出しにでてくる事があります。私が何となく思いまするに、無音さんは、誰かを探しているように思う時が御座います。あ、申し遅れました、私は、多音(たのん)と申します」

この多音という尼には、この地方の訛りが無い。

「貴女は東京のお生まれですか？」

と男は、世間話のつもりで気軽に訊いた。

すると、尼の眼に急に涙が浮かび、何かを思い出してしまったように、急に伏眼がちに

なると、指先で軽く眼を拭った。

何かを話したような雰囲気を察して、労るように男が言った。

「思い出すのも悲しいような事は、つらいでしょうから話さない方がいい。でも人に話して楽になることなら、僕でよければお聞きますよ。

忘れてしまったつもりのままずっと苦しみ続けてることが、人にはまあるものです。その思いの基層に隠れてるものが、あなた方姉妹の歴史のなかに埋もれてるかも知れない。話すことで気づく事もあるんじゃないでしょうか？」

それならと、多音は、独りずっと胸につかえていた過去を語り始めた。

「私は、これでも、昔は、大邸宅で奥様と呼ばれる暮らしをしていたんで御座いますよ。その時が幸せの絶頂でした。そこへ、突然、生き別れていたあの妹がやって来たので御座います。それからでした、...何もかもが変わっていったのは...」

多音

(多音の話)

「...実家は、町の小さな板金工場で、両親は共働き。休日も付き合いで外出したまま留守でしたから、幼い頃から妹と私のふたりで暮らしていたようなもので御座いました...」
姉の自分は、活発で明るく成績も良かったがあまり物事を深く考えない性質だったのに対して、妹の方は無口で暗く成績も良くはなかったのだが、学校の勉強と関係のない事はひとよりよく知っていて、何かに集中すると寝食も忘れるような子だった。と多音は静かに語り始めた。

「妹が中学三年、わたしが高校三年のときでした。大学進学を夢見て予備校の夏の模試を受けた直後で、志望校へ入れそうだなとそんな思っていた頃でした。実家が倒産しまして、父は破産。悪い債権者に追い込まれたのでしょ、わたしたち姉妹は売られそうになったので御座います...」とそこまで話した時、再び多音の眼に涙が浮かんだ。

事態を察知した高校生の姉は、事情を告げて遠い親類の元へ中学生の妹を逃がした。「姉さんは大丈夫だから、とにかく身を守る為に逃げるのよ」とそう言って、泣く妹を諭した。そうして、姉自身は借金のため自ら覚悟して売られて行った。待っていたのはまさに苦界であった。

それから姉はずっと妹のために親類に仕送りを続けた。時折、公衆電話で、妹に直接暮らしぶりを確認し、「姉さんがついてるからね。お前は幸せな人生を生きるのよ」と言うと、必ず妹は「うん」と泣いて答えた。

ところが、それが、或る時から、ぶつりと連絡が取れなくなり、妹は失踪したまま、生き別れになった。

姉はもう居ても立っても居られず、親類の家へかけつけたが、一層謎は深まった。妹は、何ら生活にも本人にも変わりなく、その日も元気に学校へ行ったが、しかしそのまま帰ってこなかった、という。事件か事故に遭ったに違いない、と通学路や周辺を姉は必死に調べたが、まったく何も手がかりは無かった。

多音が妹の必死な搜索をしている時、偶然知り合った市長の息子が彼女の搜索を熱心に助けてくれた。それがきっかけで二人は恋愛関係になり、やがて見初められて、姉は苦界から一転して玉の輿に乗ったのだった。

「富豪の奥様になって邸宅で暮らす毎日が始まったので御座います。幸せの絶頂でした。やがて、わたしたち夫婦は、あとは子供だね。子供が欲しいね、と自然に切望する会話を交わすようになりました。もし女の子だったら名前は何にしよう？ と夫が言い、わたしが、そうね... マノンはどうかしから？ と言うと。夫が、いいね、マノンにしよう。そんな会話をしていた折でした。そこに、突然、失踪していた妹が現れたのは。

驚きましたとも。ですが、驚くことが更にありました。

ですがともかく、わたしは、居間で妹とふたりきりで面会いたしました...」

そう語った多音の眼には、当時の風景が蘇っているようだった。

「あなた、一体、いままで何処へ...」

「ごめんなさい、姉さん。ぜんぜん連絡もしないままです。私はずっと死のうと思いつつ悩みながら...できなくて。今までズルズルと...。時間はもう止まったまま。何が何だか、自分でも、もう判らないの...」

そう言うのが精一杯で、妹は嗚咽を抑えきれずに号泣した。

突然現れた失踪していた妹は、姉の記憶にある印象とは随分変わってしまっていた。もうすっかり大人の女になっていたし、それに何と、腕の中には赤ん坊を抱いていた。しかし、悲壮感が尋常ではない。それに、片足を引き摺っていた。暮らしに困っているようには観えない服装をしているが、眼には地獄に落ちた者のような深く闇がかった

「姉さん、何も言わず、この子を、マノンを預かって下さい。姉さんしか頼める人がいないの。どうかお願い」そう言って妹は、自分の臍ごと胸に抱いた赤ん坊を、姉の胸元へ寄せた。

姉は、赤ん坊を抱いたまま臍を寄せてきた妹を、そのまま包むように抱いた。左腕は妹の頭を、右手は妹の背中を、しっかりと抱きしめた。苦勞を分かち合うように静かにじっとそこで姉妹は身を寄せ合った...

「マノンっていうのね、その子の名前」

「ええ」

「わたしがお前にあげた人形の名前ね。お前 可愛がっていたものね」

「ええ。姉さんが可愛がっていたお人形。おさがりだったけど、嬉しかったの。姉さん、大切にしていたでしょ。それを、私にくれたから。姉さんがくれたから私、大切にしていたの...」

そこで、ふたりは、それぞれの思いが溢れて、泣いた。

何か、事情がありそうな妹の様子。姉は何も訊かずに赤ん坊を引き取った。元々あまり深く物事を追求しない性格の姉には、妹の様子だけで理由は充分だった。

妹は「必ず子供は引き取りに来ますから。それまでご面倒をかけます」と深々とお礼をして立ち上がった。姉は、ここで一緒に暮らしましょうと引き止めたが、妹は寂しそうな笑顔で姉の手を握ると、黙ってかぶりを振った。そして私はまだ失踪したままにしておいて欲しい。子供を迎えに来るまで。

これは、その子の養育費に、と、妹は姉に一千万の札束を渡した。

「これ、お前、一体？」

「何も言わないで受け取って頂戴」

そう言って、足を引き摺りながら妹は、死んだりしないから大丈夫よ、と姉を安心させるように微笑んで、再びまた行方の知れない場所へと去っていった。

「いつでも家へおいでね。連絡も頂戴ね」と、意志の固い妹を寂しく見送った後、姉は、抱っこしている赤ん坊が目を覚ましたので、あらためてその顔を母親の様な気持ちで覗き込んだ。そして仰天したのである。

赤ん坊は、顔がベシヤリと潰れていた。その形相が、多音を見て小気味よさそうに嗤っていた。背筋が凍るほど凶悪な顔で。

(つづく)

2023/07/23

「夫も、わたしがずっと探していた妹が生きていて、訪ねてきた事に感動しておりました。根は話のわかる親切な人でしたから、わたしたちはその子を養女にしてもよいつもりで育てることに致しました。ですが...」

多音はちょっと言葉を詰まらせ、言いにくそうに続けた。

「その赤ん坊は、まったく可愛くありませんでした...。いや顔が潰れていた事ではあり

ません。それはむしろ哀れを誘うものでした。そういう意味ではどんな子供であっても憎めないところがあるもので御座います。ですが…」

だがあの子は完璧な例外だった、と多音は実感を込めて言った。当初は女性として十分な品格を備えた乳母をつけた。が、抱っこすると、滅多やたらに頭突きをし、歯が生えてくると今度はやたらと噛みつくので、結局、乳母は何人も辞めてゆき、徐々に、武道や格闘技の心得のある屈強な女が、分厚い防具を身に着けた飼育係とならざるを得なかった。

「その事からも、どんな子供だったかお分かりでしょう」と多音。

やがてその飼育係は手に鞭を持つようになった。しかし、それでも、依然としてマノンの行動はおとなしくはならず、成長するにしたがって、むしろ悪さが増していった。池で泳ぐ金魚を手で掴んではみな庭へ放り投げて大嘔いしたり、子猫を袋に入れて蹴り回したり、忠実な犬を座らせておいて熱湯を浴びせたり、使用人や来客にも手当たり次第に残忍残虐な非行は絶えなかった。それはまるで、慈悲を向けている多音夫婦に日々絶えることのない苦しみを与えようとしているかのようだった。

「どんなでも、子供はどこか可愛いところがあるものだよ、と言っていた夫も、『信じられない事だが、あの子は、初めて見る人でも、ただひと目みた瞬間に、何の理由もなしにただ、瞬間に（憎い）という気にさせる。リクツじゃない不思議なあの子のあの作用は何なのかな?』と、何度も首をかしげて居りました。

実際、わたしも、妹の子ですからなるべく可愛いがろうと務めました。が、どうしても心底無理なので御座います。夫が言うように、見た瞬間に憎いという気持ちにさせられるのです。理由は全然ないんです。むしろ、慈悲の心や弁護してやりたいという気持ちでいても、あの娘を見た刹那、瞬時に、やさしい気持ちは消し飛んで、ただ単に憎いというふうに感じるのです。御座います。

顔が潰れているからでは御座いません。潰れる以前からある、あの子の形相、目つき、雰囲気、それらにそういうものが備わっているのだと思います」

「その子の行状のせいで憎くなる、というのではなくてですか？ ただただでリクツじゃない嫌悪感を生じると？」

「はい。それが赤ん坊・幼児だから不思議なんで御座います。

…それと、もうひとつ

あまり気にしなかった事でしたが、あの娘は、これも不思議で御座いまして、成長してもずっと幼児語のままでした。脳に損傷があるのかも知れない、残虐なものそのせいではないか、と夫が言い始めました。

それで、夫は、父親が市長をやっているし、やがては、自分も選挙に出なければならぬから、あの子の存在は外聞を憚ると申しまして、屋敷の最上階の一番奥まった部屋を改造して、特別な部屋を造り、世間の目から完全に隔離したのです」

「すると、言葉は悪いですが、要するに世間体を憚り、座敷牢に幽閉して育てることにした、ということですね」

「そういう事になるのでしょうか。

ただ、部屋はなるべく快適になるよう設計してもらい、秘密を守る看護人を24時間住み込みで付き添わせました。鞭は持たせず代わりに安全のため鉄格子を嵌めて仕切り、定期的に精神科医に様子を診てもらいながら、教育についてもまた考えよう、ということになりました。

正直言いますと、それから、邸の中にようやく心の休まる平和が訪れたので御座います」

「しかし」と手帳に速記でなめらかにメモを取りながら聴いていた男は言った。「それでも、事はまるく収まらなかった、というわけなのですね？」

「はい。まさにその通りで御座いました……

それから暫くして、夫が、養女を連れてきたんで御座います。知人の夫婦が航空機事故に遭って亡くなり、他に身寄りの無い女の子を、夫はわたし達で引き取ろう、と。それはとても美しい娘で、マノンと同年でした。

わたしは、その娘がひと目で気に入りました。その娘は、マノンとは対照的でした。一目みた瞬間に、誰でも、気持ちが癒やされて愛さずにはおれない、まるで妖精としか思えないような少女で御座いました。少し話ただけで可愛くて堪らなくなりました。わたくしたち夫婦は、心からその娘のことを愛としいと思ったので御座います。

で、さっそく、その娘を、養女に迎えました。ただ、その時、夫は、戸籍を操作して、その子をマノンとして、わたし達の娘にしたのです。

世間には、あの邸には醜悪で恐ろしい娘がいるという噂がたっておりまして。あれが邸から出てきて小学校に通うようになったら大変だ、と。そんな風評のなかで、はい。そうです。美しいマノンが小学校へ通い始めました。

あの娘を一目みて、悪く言う者など居りません。敵意のある者でも、あの娘をみると一瞬で親切な気持ちに変わります。マノンは、美しく優しく賢い、ほんとに良い娘でした。世間の評判は一気に変わりました。

わたしたち夫婦は、二人だけで密かに、幽閉した醜悪な子を（魔ノン）と呼び、美しい娘の方を（真ノン）と呼んで、区別して呼び分けるようになりました。

...そうして、真ノンが小学四年生になったとき、夫は市長になりました。

夫は付き合いも増えて家を留守にする事が多くなり、私も妻として忙しく外出がちになりました。

すると、暫くしてまた、邸のなかで騒ぎが起こるようになったのです。

真音が、屋敷内で怪我をする事件が多発しました。最初は、小さな怪我で、真音が申しますには、突然、置物が倒れてきた、とか、階段に糸が張ってあった、などでした。が、それが徐々にエスカレートしていき、真音が中学に入学した時は、階段から突き落とされ、高校入学の時は、シャンデリアが落ちてきて、あわや大惨事になるところで御座いました。

『お母さま、怖い』と真ノンは訴えるように必死に私にしがみついて来ました。『この家には誰かいる、わたし怖い』と。『上にあるアノ奥の部屋は何？』と怯えた目で訊きました。嗚呼、あの時、何かもっと手を打っておけば、と、今でも悔やまれます」

「何か、手を打たれたんですか？」

「はい。夫は、その時、魔ノンの監視は強化しておりました。部屋の出入り口の内側にも鉄格子を嵌め、出入りを厳重にしていたのです。なのに、相次いで事故があるのですか

ら、魔ノンは恐らく隔離部屋を密かに出入りする方法を見つけていたに違いありません。

徐々に、真ノンが負わされる怪我は大きくなっておりました。今度は死ぬのではないか、そんな恐怖に、わたしたち母娘は怯えていたので御座います。

真ノンの高校卒業の祝賀会を兼ね、あの娘の18歳の誕生日会を盛大に行うことになっておりました。それが、一週間後で御座いました。

きっと、その日かその前後に何かあるに違いない。
その胸騒ぎが、日々強くなっていたのです。

夫は邸内に警備員を常駐させました。それなのに...、嗚呼それなのに...

多音の瞳にはあの日の記憶が蘇ってきた。

(つづく)

2023.7.24

「あれは.....、ちょうど、真ノンの18歳の誕生日が三日後に迫っていた夜のことでした.....」

遅い時間だった。多音はベッドで薄っすらと眠りに入りかけていた。

「ぎゃああああああああああ.....」

真ノンの部屋から絶叫が聞こえ、邸の静寂を切り裂いた。

多音の心臓が一気に縮むほどの叫び声だった。心臓がそのまま止まるかと思った。

飛び起きた夫と、常駐させていた警備員が真ノンの部屋に駆けつけた。部屋のドアは開いていて、真ノンは暗闇の中、ベッドの中にいた。明かりを点けると、外傷は見られなかったがショック状態で、暫くは何を訊いても声が出なかった。多音も他の女中もみなそこへ駆けつけた。

暫くしてようやく声が出た。

「...いま、誰かが部屋に入ってきたの

...寝ている私を、覗き込んでたの...、恐ろしい顔が... 化け物が...

闇のなかで…火のついた蝋燭を持って、…私の顔をじっと。
睨んでいたの…怖かった……ああ、怖い …ああ」

顔を覆って真ノンは激しく泣き出した。皆んが来て急に安心したのでろう。多音が、もう大丈夫だからね、と抱きしめてなだめる。それでも、泣き止むまでには時間がかかった。

夫は警備員を連れて、すぐに魔ノンの監禁部屋へ走った。真っ暗な螺旋階段を駆け上る音だけが響き、最上階の部屋の扉に昔風の大きな鍵を突っ込んで回すと、ガチリという金属のゴツイ音がした。扉を開けるとまた更に、出入り口を塞いで銀色の細い鉄格子が閉まっている。その重い錠を開けて、なかへ入ると、通路の奥で付き添い人が泥酔して寝ており、その横の太く頑丈な黒い鉄格子は何事もなかったように閉まっていた。その中に、しかし、魔ノンの姿が見えない。夫と警備員はそれぞれ武器を手にして中へ入り、くまなく調べてみたが、洋風の個室の奥に設えたトイレの中にも、隣の浴室にも、魔ノンの姿は無かった。

「やはり、魔ノンの仕業だったか」と夫は怒声を吐き捨てた。「探せ。邸のなかを隈なく、そして邸の外もだ」

——しかし、増員した捜索隊が、邸内の全ての場所、庭の隅々まで、徹底して何度探しても、魔ノンの姿はまったく見つからなかった……。

その夜は、ともかく、真ノンの安全が第一と、彼女の部屋の扉の前には警備員2名が常駐して見張った。室内には多音が残し、娘と一緒に寝ることにした。

抱きしめている多音の腕にしがみついた真ノンは、まだ身を小刻みに慄わせていた。そして、目をつぶって小さく何かをずっとつぶやいていた。

多音がそっと耳を寄せると、
「怖い、…先生、…嗚呼先生…助けて怖い」という細くて可憐な声が聞こえた。

*

「それが、真ノンの18歳の誕生日の三日前の出来事で御座いました」

「彼女が眩いていた、先生というのは、誰なんです？」

メモをとる筆を止めて、男が尋ねた。

「おそらく、当時うちに来ていた家庭教師の先生だと思います」

と多音は、しばらく黙ったまま考えていたが、何かを確信したように、再び話し出した。

「じつは...、その人が、今思えば... すべての原因なのかも知れません.....」

当時、わたくしの他には、誰もそのことに気づいてはいなかったろうと思います。その先生の話しを少し致しましょう。実は、その先生と申しますのは.....」

(つづく)

07/28

言葉からの物語

著 ハァモニイベル

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
